

山川菊栄について

植木とみ子

女性史という言葉から連想されるイメージとはあまりにもかかけ離れ、現代的に過ぎるかもしれないが、今、私は山川均・菊栄夫妻の結婚生活に興味を持っている。菊栄に関しては身近に接してこられた方々も多く、さらに専門的な研究も進められ、何を今更との感も無いではないが、このところを私がとくに自分で確かめたいと思ったのは、二つの理由からである。

これまで私は、有地亨九大教授を中心とした文部省科学研究費による離婚調査を通して、「女性の職業的自立が離婚の原因ではない」と主張してきた。この点に関しては、先頃発表された総理府予測「二千年のライフスタイル」においても、「女性の就業による家族機能の弱体化の問題は小さい」とされており、すでに大方の承認を得ているようである。私はこれをもう一步進めて、女性の就業が夫婦関係にどのような好影響をもたらしたかを、女性の生活の中から実証したいと思っている。ちなみにアメリカの社会学者ジョン・スカンツォーニは、このような場合は競争関係であり夫婦関係にはなじまないと述べ、かかる考え方は現在の我が国でも支配的である。

もう一つの理由は、非常に個人的な動機であるが、志半ばにし

てガンで逝った一人の女性問題研究者とのオーバー・ラップからである。彼女は才能、行動力、優しさといったものに満ち溢れていた。それだけにまた、回りの者には一種近寄り難い別格な人として受け止められていたようである。しかし、私は彼女がそれらの表面に現れた事象の底に、すべての人間の持つ弱さも併せ持っていたことを知っている。そしてそれだからこそ、彼女は私にとってより身近な存在となりえたのである。

菊栄が亡くなる前の年、私は彼女に連れられて藤沢の山川家におじゃました。私は失礼をも省みず、均との結婚生活について質問した。「二人とも病気がかりで、夫婦げんかをする暇もありませんでした。」と多少はにかんだ様子で、笑みを浮かべながらおっしゃった菊栄の顔が目には浮かぶ。今、私の手元に一九七九年七月三十一日付けの、菊栄から頂いた手紙がある。年譜によれば八月には風邪をひき、その後筆をとることも困難になったようであるから、ひょっとしてこれが最後の直筆の手紙だったのではないだろうか。

菊栄の個性を知りたい。井上種子氏は山川菊栄の個性として、「合理主義的生活態度」「生活者としての知恵」「山川夫妻の夫婦関係の見事さ」の三つを挙げておられる。さらに鹿野政直氏は、論理が「われ」にすぎらなくとも自立できる、社会科学者としての菊栄に注目した。このような「個性」の発現を可能ならしめた条件はどこにあったのか。この辺を自分の手で明らかにし、菊栄という大先達をより身近に感じたいと思う。

(長崎大学・家族法、家族関係学)